



たいしも通信

今月の原稿を考えていたところ、地本で委嘱された自衛隊公式ねこ(キャラクター)ではなく本物のねこが中央即応連隊を表敬、というニュースが舞い込んできました。今回は少し肩の力を抜いて、自衛隊の扱う動物について、防衛関連ニュース第18弾をお送りします。ただし、4月だからといって、エイプリルフールネタではございません。

◆自衛隊が扱う動物

駐屯地や基地に勝手に侵入してきた輩ではなく、正式に自衛隊が扱っている動物の種類は、警備犬と乗馬用の馬に限定されます。残念ながら緊急通信用の伝書鳩、水中捜索用のイルカなどは今のところ存在しません。

◆警備犬

イメージとして陸自に多くありそうですが、実際は空自に多く配置されています。陸・海自にも警備犬はいますが、空自が特に体系的な運用が進んでいるようです。

主な任務は基地警備であり、不審者の発見、侵入者の追跡、警戒巡回などがあります。高い嗅覚と敏捷性を活かし、人間では気づけない「兆候」を察知する能力が重宝されています。

さらに近年では災害派遣任務も増加し、行方不明者の捜索や倒壊家屋での生存者探索にも活躍しています。空自入間基地の「ジャスミン」は、2021年の熱海土石流や能登半島地震にも派遣されました。また、警察犬・災害救助犬と連携したり、ペット救助チームと協働して飼い主と離れた犬猫の救出等にも活躍しました。

犬種は精悍なジャーマン・シェパードが真っ先に思い浮かぶと思いますが、ベルジアン・マリノアが近年の主力(見た目はほぼ同じ)で、どちらも「人間と働くことが大好き」な犬種で、訓練

への適性が非常に高いのが特徴です。

自衛隊の警備犬には階級はありません。「隊員としての扱い」は非常に丁寧ですが、法的な隊員身分を持たないため階級は付与されないのです。これは警察犬・海上保安庁の麻薬探知犬など日本の公的機関の「働く犬」全般に共通する考え方です。

2026年、自衛隊はロボット犬の導入試験を開始しましたが、これはあくまで偵察・危険地帯の先行調査が目的です。生身の警備犬の「嗅覚」や「判断力」は代替不可能であり、ロボット犬は「補完的存在」として位置づけられています。

◆乗馬訓練用の馬

習志野の第1空挺団では馬を保有し、乗馬訓練を実施しています。目的としては①礼式(儀仗)、②隊員の体幹・バランス訓練、③精神集中などです。かつては鞍馬(車両やそりを曳かせること)として実働任務もあつたようですが、現在は訓練・儀式用途に限られています。他には自衛隊体育学校や防衛大学校でも保有して訓練に使用しています。

◆広報・地域連携での「公式ねこ」

冒頭で述べた栃木地本の公式ねこ「羊子」は一般家庭の猫を「公式ねこ」として委嘱、駐屯地訪問、装備見学、隊員との交流など広報活動に参加し、SNSで人気を博しています。ただしあくまで「広報協力」であり、軍用動物ではありません。

▼編集後記▲▲

実は海外では、米軍のように軍用犬に階級を与える国もあります。しかも「犬はハンドラーより1階級上」という伝統もあるそうです。これは虐待防止と敬意の象徴、いわゆる「文化的・象徴的なもの」であり、日本では採用されていません。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。